

教信者たちの西海岸地域への帰還

日米開戦と同時に、アメリカ本土では天理教の教会長や布教師らが逮捕・抑留されただけでなく、やがて家族たちも他の日系人と共に西海岸の居住地から強制的に立ち退かされ、抑留された。各抑留所や収容所では細々と月次祭や信仰活動が継続されていたものの、実質的な布教活動は中断を余儀なくされた。また終戦直後は帰る家もなく信者も四散していたため、天理教伝道再建のめどは容易にはたてられない状況であった。戦前に西海岸に設立されていた教会の復興は、教会長や家族の抑留や収容状況によって様々であったが、その一例としてロサンゼルスのアメリカ伝道庁をみていくことにする。

アメリカ伝道庁の建物は、戦時中黒人系キリスト教会に貸与されていた。戦後、教会長や信者たちがロサンゼルスに帰還すると、庁舎はそのまま黒人系キリスト教会が使用していたため、交渉の上返還してもらい、住宅難の教信者のホステルとして利用した。一時には、19家族81名、独身者9名が同居していた(天理教アメリカ伝道庁編『天理教アメリカ伝道庁50年史』天理教アメリカ伝道庁、1984年、30頁)。こうした混乱の中で、アメリカでの生活をあきらめ、日本へ引き揚げた布教師や信者たちもいた。戦前から伝道庁の書記を務め、戦後に3代庁長となった吉田進は当時の様子を以下のように述懐している。

教会は太平洋沿岸総立退きで、あとかたも失くなり、信者は離散して、復光の見込みもたたなかった。帰っても住む家もなく、生活の保障は何にもなかった。同じ苦しみをなめるようなら負けたとは分っていても日本へ帰った方がまだましだ、という考えをもつ者が教会長の中にも何人かあった。それも全く無理ない事だった。これらの人を説いて、今後のアメリカ布教のため足を留めてもらうのに、一苦労だった。私自身さえ、残ったとしてもこの先一体どうなるものか、見当もつかず、大きな不安に駆られていた。(『一れつ』No.238、1974年11月号、6～7頁)

こうして吉田は、一人でも多くの教信者をアメリカに引き留める努力をし、徐々に体制を整え、教義講習会を開催するなどして、管内活動の立て直しに奔走した。1951年には中山正善2代真柱が戦後初めて渡米し、管内の教信者を元気づけるとともに、新たな活動の一つとして日米関係友好化への貢献を掲げ、日本文化紹介のために教会本部から伝道庁に図書が定期的に送られるようになった。そして同庁内に「ひのもと文庫」が設けられ、所蔵書籍2万冊を一般に公開して日本文化の紹介につとめた。この文庫に関しては、南カリフォルニア州の歴史を綴った『南加州日本人史 後編』(越智道順編、南加日系人商業会議所、1957年)で特筆すべきこととして記されている。

中西部・東部への展開

戦時の抑留と強制収容によって、アメリカ本土の西海岸に集住していた日系人たちの中には、アメリカ政府の政策もあって戦後に中西部や東部地域へ転住していったものもあり、その中には天理教の教信者も含まれていた。そしてこれが契機となり、布教活動が中西部や東部でも展開されるようになった。戦

前、多くの日系人にとってアメリカ中西部・東部は無縁の地であったが、戦後は各地に日系人が定住するようになった。また飛行機などの交通手段が改善されて行く中で、人々の交流も頻繁となり、布教活動伸展の上にも大きく影響することになった。

サクラメントに戻っていたサクラメント教会2代会長の小島久満吉が、1947年2月にニュージャージー州のシーブルックに収容されていた橋本庁長を訪問し、その後シカゴで布教活動に従事していた布教師や信者たちを訪れたことによって、布教拠点開設の動きは促進された。1950年にはシカゴにおける最初の天理教教会としてウエストシカゴ教会が設立された。『シカゴ日系人史』(藤井寮一編、シカゴ日本人会、1968年)には、戦後の仏教会、キリスト教会などの宗教界の動きが記されている。天理教に関しても、「天理教ウエスト教会(ウエストシカゴ教会を指す、筆者註)の鎮座奉告祭は1950年11月28日に南ソーヤー街1953で執行され、教会設置奉告祭と鈴木いまよの教会長就任奉告祭は、アメリカ伝道局長その他の出席を得て翌19日に営まれた」(同書、300頁)と記されている。

こうして、戦後、日系人がアメリカ全土へ拡散していく中で、太平洋沿岸の日系移民社会に限定されていた天理教の伝道が伸展し、イリノイ州、ニュージャージー州、カナダのオンタリオ州トロントなどへ教会が移転したり、また新たに設立されたりした。1951年にアメリカ各地を巡回した中山正善2代真柱は、西海岸へと帰還した日系人たちが再建に苦しみ疲弊している中で、「立派に教会として、むしろ心身共に疲れたと思われた西海岸の教会よりも、新設教会としての活気さえもって、シカゴには教会があったのであります」(『みちのとも』1951年12月号、12頁)と、シカゴの布教師たちが新たに活発な動きを見せている様子を述べている。

「アメリカ人」としての定住と世代交代

戦後、一世たちは「アメリカ人」として定住を決心するようになったとされる。吉田進3代庁長は、戦前と戦後で大きく変わったことの1つとして日系移民社会の一世たちの意識をあげ、「戦前の在留同胞は腰掛け的な気持であったが、今度は、自分はアメリカの土になる、又、子供はアメリカ人であり、アメリカにとどまるから親達もアメリカの土になるという気持ち」(『みちのとも』1949年、6頁)になったとし、言葉の問題、文化習慣の違いなどによりアメリカ社会にとけこめずにいた日系人たちが生き方や考え方を大きく変えたと述べている。

また戦後は成人した二世人口が増加し、日系移民社会の中心的存在が急速に二世へと移行していった。戦前、「1924年移民法」の制定以降、日本人の移住を目的とした渡航が禁止されると、アメリカ人である二世を日本とアメリカの「架け橋」として育成しようとの動きがあったが、日米関係が悪化し最終的に開戦したために頓挫していた。このように一世たちの中には、アメリカ社会に適応していく上での二世への期待は戦前からあった。天理教においても、戦前から二世の育成は大きな課題であったが、戦後には非日系人への布教活動を考える上からも、一世による日本語での布教が、徐々に二世により英語で行われるという新たな展開がより期待されるようになったのである。